

3 地域特性を活用した学校からの情報発信の実践

(1) はじめに

ここ1、2年の間にインターネットに接続して教育活動に活用する学校が急速に増加し、それに伴ってホームページを開設する学校も多くなっています。まだまだ学校紹介の域を出ていないものが多いと言われる一方、特色ある内容を持ち、全国から多くのアクセスがある学校ホームページも増えてきています。

京都府内にもそうした内容をホームページで発信している学校がいくつか見られますが、その一つとして、地元地域の優れた特性に着目し、それを教育活動に生かしている実践を紹介します。

(2) 「学校紹介」からの脱皮

園部町立西本梅小学校は、京都みらいネットの拠点開設時から接続し、早くから学校ホームページを発信してきましたが、校長先生には、「学校のホームページが単なる学校の紹介でよいのだろうか？」という疑問がありました。地元の西本梅地域は、学校教育への期待が大きく、それを支援するという伝統が続いてきているうえに、元教員の方などを中心に、地域の地理や歴史について研究しているグループがあります。そのグループが、研究の成果を「丹波古道」と名付けた冊子にまとめ、学校に寄贈されたことをきっかけに、同校では「地域研究を更に進め、その成果を電子情報化（CD-ROM作成）するとともに学校ホームページから発信することで、子どもたちの地元への理解と情報活用能力の育成を図ろう」と考えました。

そこで、学校ホームページの在り方を次のように考えました。

- ・ この学校にしかできない内容を発信することで、児童が地元のことを自分たちで調べてみようとする意欲を高め、それを支援する。
- ・ それぞれの学校が地域の特色を生かしたホームページを発信すれば、互いに閲覧することで、類似点や違いを知ることができ、学校間交流も促進される。

つまり、「一般的な内容は図鑑や資料などで調べることができるが、子どもたちがその地域ならではの独特なものを調べるにはそれらは活用しにくい。各学校がそれぞれの地域の様子などをホームページから発信することで、隣接した学校との類似点や違いをそこから発見して、地域のことをより知ることができる。」という考え方です。

情報教育推進の中心となっている先生は、「本校から丹波地方のすべてのことを発信しようと思っているわけではありません。例えば、川の上流にある学校は上流の様子、中流や下流にある学校は、その様子を紹介するというように、それぞれの学校が地元の紹介を分担することで、流域全体の様子が分かることになり、同じ川の流域にある学校が府県を越えて交流することもできるようになると考えています。」と話しています。また、研究がまとまってから全部を一度に発信するのではなく、時間と手間をかけて地元のことをまとめ、少しずつ増やしていくという計画で進められています。このことによって、子どもたちが、自分のペースに合わせてそれを理解し、地域の良さを知り、地域に学ぶことに有効に生かされることにもなるという考えです。

そこで、学校や町の図書館、府立総合資料館などに保存されている資料をはじめ、地元に関

する書物、記録、地図、絵画などの資料を多面的に集め、更に子どもたちがもっと知りたいと思うことを見つけ、先生と一緒に調べてみることにしました。まとまったものから順にホームページから発信していき、その「西本梅百科」をCD-ROM化していく計画です。「丹波古道」を紹介するページには、次のような「課題」が提起されています。

大きな課題

この本は西本梅地区にあるすべての家庭に配布されましたからみなさんの家にも必ずあります。現物をぜひ手にとってすみからすみまで時間を十分かけて何度でも読みましょう。西本梅地区のことがたいへん詳しく書かれていますから大人も子どもも使えます。先生たちにとってもこの本にはたいへん参考になることばかり書かれています。この西本梅百科を作ることになったのもこんなにすばらしい本があったからです。その証拠（しょうこ）に西本梅百科のあちらこちらに「丹波古道」に書かれていることが出ています。

さて、ここでみなさんに大きな課題を出します。この本に書かれていることをしっかり読んでもっと知りたいことをぜひ見つけましょう。そして、それをみなさんと先生で調べて今度は西本梅百科に分かったことや考えたことをどんどん入れていきましょう。家族はもちろん本梅探友会の方々や地域の方々の力も借りましょう。

(3) 著作権への配慮

この企画を同研究グループである「本梅探友会」に相談したところ、会員の方々はたいへん好意的で、進んで協力していただけることになりました。しかし、「西本梅百科」に収録する資料には、会員以外の著作物もたくさん含まれます。電子情報化、とりわけホームページからの発信には、その中に収録される論文、写真、地図、絵画等すべてについて、著作者の了解を得る必要があります。先生方にとって、その手続きにはかなりの労力を要しましたが、情報教育を推進する上で、絶好の研修機会ともなりました。子どもたちが地元のことについて調べた内容もホームページから発信しています。現在のところ、ホームページ作りは先生が担当し、いくつものデザインを用意し、子どもたちが相談してその中から自分たちの思いに沿ったものを選び、更に修正したうえで発信しています。子どもたち自身がホームページを作成するようになり、著作者の了解が必要な内容が含まれるようになった時には、先生方の経験が大いに生かされることとなります。

(4) ホームページ作成上の工夫 ~ 誰に伝えるのか

地元のことを紹介するページには、大人向けの説明と子どもたち向けの表現や漢字使用上の考慮がなされた説明とが付けられています。このことは、情報の発信・伝達は、受け手の状況を考えて行うことが大切であるということを読む子どもたちに自然に伝えています。

また、学校のホームページは「分かりやすいこと」をコンセプトの一つにしています。作成担当の先生が用意したいくつものデザインを全部の先生に見せて、誰にでも分かるものになっているかどうかを検討して選定します。ここでも、受け手の状況を意識した情報発信が心がけられています。

(5) 情報活用能力育成の取組 ～ 自然体験も大切に

同校では、学年を超えた子どもたち同士の交流や助け合い、自然との触れあいも大切にされており、10月には、「京都府立るり溪少年自然の家」において、2泊3日の「生活体験学校」を同自然の家、町教育委員会と学校の三者の共催で実施しています。1年生から6年生までが異年齢のグループをつくり、自然探検や天体観望、パンづくりやそば打ちなどいろいろな体験をします。宿泊についても、できるだけ大人の助けを借りず、高学年の子どもたちが中学年や低学年の子どもたちの世話をします。全学年を対象とした宿泊行事という点で、全国的にも珍しい取組と言えます。子どもたちはこの体験行事から多くのことを学ぶとともに、大きな感動を得ます。保護者からは、「この体験学校から帰った後、参加する前に比べて子どもが成長したことがはっきり分かる。」という声が多からず寄せられています。家庭における自分の役割が自覚できるようになったというのです。

平成11年12月に、子どもたちの希望で「感動発表会」が開かれ、先生方や保護者に生活体験学校で体験したことや感動したことを発表しました。その際には、発表の仕方に工夫を凝らし、グループごとにコンピュータ等を活用した発表資料も用意しました。

この生活体験学校への参加を楽しみにしていながら、発熱のため参加できなかった子どもがいます。そこで、学級の子どもたちは、その友だちに感動を伝えるために、感想文にコンピュータを使って作成した画像を添えて、冊子にまとめました。ここでも、「誰に何を伝えるのか」ということがきちんと意識されています。このように、自然とのふれあいや異年齢集団で助け合うことを目的とした特別活動が、情報活用能力の育成としても機能しています。

そのほかにも、学校の様子をビデオに収め、できるだけ多くの機会に町のCATVから町内の各家庭に発信するなど、保護者や地域の人々との連携を図るためのいろいろな取組がなされています。校長先生は、日頃から学校と地域とが密接な関係にあること、そしてヒューマンネットワークを築くことの大切さを強調しています。

(6) すべての教員が情報活用能力の育成に当たる ～ 校内研修の工夫

同校では、すべての先生がコンピュータを操作でき、更にはそれを使って指導できるようにするため、計画的に実施される校内研修以外にも、習熟した先生が他の先生の質問に答えるなど校内で研修が行われています。また、授業等で使えるホームページのリンク集を作成するに際しては、担当の先生が候補として多くのページのURLをフロッピーディスクに入力して全部の先生に配り、夏季休業期間中に分担して中身を点検し、学校のリンク集に収録するのにふさわしいかどうかを調べてもらう、という方法をとっています。こうすることによって、先生方のホームページについての理解が深まると同時に情報検索のスキルも向上し、自校ホームページのデザインについて担当者に意見が寄せられるなど、研修としての効果も発揮しています。

(7) 優れた情報発信が優れた情報をもたらす

同校のホームページは、保護者や地域の方々はもとより、全国から多くのアクセスがあり、電子メールなどで感想や関連した情報が寄せられています。そのことがまた同校のホームページづくりに生かされていきます。校長先生の、「良い情報を発信すれば、それが良い情報をもたらしてくれます。」という言葉は、学校の情報発信の在り方にとって重要な示唆に富んでいます。